

六甲山新聞

表六甲ドライブウェイは個人がつけた？

人々が六甲山を訪れるようになり、駕籠（かご）、馬車や馬が通り始めました。効率がよくスピーディーな交通が求められる中、最も早くに出来た道路は裏六甲ドライブウェイでした。



昭和2年（1927年）大阪で鑄鋼所（ちゅうこうじょ：金ぞくをとかして製品、部品を作る工場）の社長をしていた奥村さんは、私財12万円を投じ、阪急六甲から土橋～山上の前が辻まで幅約4mの道路を完成させ、兵庫県に道路を寄付しました。12万円とは安いと思われるかもしれませんが、当時、お米10キロの値段は3円20銭、現在の価格はそれの1250倍です。つまり、総工費12万円は、約1億5千万円になります。

奥村さんは、第一次世界大戦の時に金属の製品や部品を作って大もうけをし、社員に33ヶ月分のボーナスを出したという逸話の持ち主です。その利益の一部で大正12年頃、約76ヘクタールの山（今の丁字が辻付近一帯）を買い込んだそうです。道路を作った後、モダンなレスト

ランを建てたり、谷川から水道を引き、移動可能なポータブルハウスを作り、宣伝パンフレットを印刷するなど、当時としては奇想天外な着想を実行し、六甲山の開発に尽力しました。馬力の弱い当時の自動車には、表六甲の急坂がなかなか厳しかったようです。その後がけ崩れが続き、昭和13年（1938年）の阪神大水害で崩壊、何年も不通のままでした。阪急の助けを得て昭和30年によく着工、翌年の31年に開通にこぎつけました。

六甲山クイズ

第一問 丁字が辻の手前の展望台は？

第二問 記念碑台の像の人物は？（簡単）

第三問 その像の人の建てた家は何番地？

クイズ解答

第一問 定員は200名でした。

第二問 ケーブルの色は赤と緑でした。

第三問 ケーブルは85周年でした。